

家庭教育に関する理論的・実践的研究 第37回大会報告

日本家庭教育学会
会長 中田 雅敏

○令和4年の第37回大会は、「家庭教育と健康—コロナ禍の経験から何を学び、どう活かしていくべきか—」というテーマをもって、3年ぶりに貞静学園短期大学の会場において対面形式で行いました。まだコロナ禍の第7波が続く中、参加人数こそ多くはありませんでしたが、午前の個人研究発表と午後の講演会ともにとっても有意義な時間でした。

○午前の個人研究発表では、家庭教育の現場での指導実践に基づいた問題点や提案、家訓の中の家庭教育、保育分野における保育者の言葉かけや保育環境の問題、などを主題とした総10編の発表がありました。

○午後の全体会では、藤原武男氏（東京医科歯科大学教授）をお招きして、「家庭・地域と子どもの健康」というタイトルで、コロナが生んだ分断、分断の先にあるもの、コロナ優沢の状況における子どもの環境と健康といった内容について、ご講演をいただきました。講演の後は、佐藤貢悦理事長（筑波大学名誉教授）の進行で、フロアーの参加者を交えて質疑討議を行いました。

1. 2022年度の主な活動概況

本学会は、1986年の設立以来、家庭教育に関する学問的研究を促進し、実生活における家庭教育の普及や支援者養成を進めています。2022年度の主な活動を以下に紹介します。

- 第37回大会の開催（対面、2022年8月20日）
- 『家庭教育研究』28号の発行（2023年3月、依頼論文1編、研究ノート4編の掲載）
- 会報109号、110号（2022年4月、10月）発行
- 家庭教育師資格認定（年2回）
- 家庭教育師・家庭教育アドバイザー交流会（2023年2月25日、講演「ケアの倫理は家庭教育に何を言えるのか—不確実な時代を生き抜くために—」（二川早苗

氏・家庭教育支援協会理事長）、情報交換・交流）

- 常任理事会（4回）及び総会

2. 第37回大会の報告

(1) 「第37回大会のご挨拶」

（奥明子副会長）

くおはようございます。ただ今、ご紹介いただきました、日本家庭教育学会副会長、並びに貞静学園理事長の奥明子です。

本日、3年ぶりに、本短期大学の校舎を使用し、第37回日本家庭教育学会大会を開催していただきますことをとても嬉しく、皆様が充実した1日となるよう願っております。

学会の夏の大会は、これまで長年にわたり開催されてきました。私も36年ほどお付き合いさせていただいてきましたが、そ

の時々、社会問題をテーマに取り上げ、家庭の教育とは何かを、実践、そして理論両面から研究してきました。

長い間、学会の仕事をさせていただいて、私自身いつも感じていることですが、家庭教育を考える際に欠かせないのは、子どもの命の尊さだと思います。人の命は何ものにも代えられないこの世で一番尊いものです。子どもの命がどれだけ価値があるのか、どれほどの人がわかっているのか、子どもが親の虐待で亡くなったり、親が子どもを放任して子どもが餓死する等の事件が起こる度に、疑問に思うのは私だけでしょうか。

日本は少子高齢社会が進み、毎年、出生率が前年度よりも減少するというデータが発表されています。子どもは国の宝です。国の未来を背負って新しい社会をつくっていく担い手であります。子どもの出生率の減少は、国の宝がどんどん少なくなっていくことを意味しています。

学会がこれまで論じてきた、子どもの虐待、引きこもり、いじめ、家庭内暴力等々についても、今もなお同様の悲惨な事件が起きています。なぜ親は、子どもの命が自分の命とは別ものと考えることができないのでしょうか。子どもの乳幼児期を原点として、家庭はそこから出発しなければならないと私は思っています。

家庭の姿はいろいろな形があると思います。家庭教育はこうあるべきだという正解はありません。親が、親としての責任を持ち、子どもを育てていくためには、子どもの命の大切さを認識し、子どもの心を大切にして、子どもと接していくという最も当たり前前のことを実行し続けることが大切だと思います。

時代が進むとともに社会構造も変わって行きます。さらに、この3年ほどのコロナ

ウイルス感染の影響で、これまでの生活様式が変わり、多くの人々が多方面から制約され、やり切れない思いで毎日を過ごしています。今後、コロナウイルスはインフルエンザと同様、人間社会に住みつき、コロナとともに生きて行かなければならない社会になるのではないかと危惧しています。

社会構造がどんどん変わり、ネット社会、仮想通貨の取引等、20年前にはおよそ想像も出来なかった社会になってきています。しかし、生活様式、家族の形態が変化しても、人の心は何時の時代も変わることがなく、社会の底流にあり続けることは明白であります。親と子どもがお互いに理解し合える家庭をつくり、子どもが自分の将来に夢を抱けるように、子どもとの関係をつくっていかねばならないと考えます。

日本家庭教育学会の地道な活動が、多くの人たちに、家庭のあり方を考える機会を提供し、自分なりの考えを持てるように、そして自分で納得できる家庭の姿を構築できるよう願ってやみません。

最後に、この大会を通して、自分で考える何かをつかんでいただきたいと願っております。以上、私のご挨拶とさせていただきます。>

(2) 研究発表 (10 編の要旨)

○中村香織氏 (公益社団法人スコーレ家庭教育振興協会) 「親の学びの重要性—親の成長は子どもの心を育てる—」

< 2018 年、走行中の新幹線の車内で殺傷事件が発生した。当時 22 歳だった犯人と三男が同い年であったことから、自分なりに事件の背景を調べた。犯人が中学 2 年生のとき、家で刃物を振り回し警察沙汰になったということを知り、三男のかつての言動と重なった。妹の入学準備として学用

品を買ったことに、小学3年生の三男が「ずるい、ずるい」と泣き叫んで床を転げ回ったできごとがあった。問題解決に向けた取り組みを実践したことで、私自身が自らの成長を実感し、親子の絆を深めることができた。私の体験を交えながら、親が学ぶことの大切さを考察する。>

○余霞氏（筑波大学大学院国際日本研究専攻）「北条重時の家訓と親子関係」

<本発表は、鎌倉時代幕府政治の中心人物である北条重時によって書かれた武家最古かつ鎌倉時代唯一の有名な武家家訓である「六波羅探題家訓」と「極楽寺殿御消息」を材料として、両家訓に示されている重時の親子関係に対する認識と態度の異同点を分析し、その背後となる歴史的・思想的な様子を探究したものである。鎌倉時代は親権の強い時代であり、親は子に絶対従順を要求していた。そうした時代において、重時は当時の法制や慣習による制約を受けながらも、その時代の豊富な仏教思想に恵まれて、とりわけ浄土思想を受け入れて自分を修養する基礎とし、温和な人情味の溢れる態度で子に接していたのであった。本発表は、そうした重時家訓に現れている親子関係の特徴を考察することを通じて、鎌倉時代の武家社会における親子関係の特徴を明らかにした。>

○杉山尚子氏（公益社団法人スコレ家庭教育振興協会）「子どもの生きる力を育てる家庭のあり方」

<父母ともに就労し、子育てを両親が担う意識が高まる中、子どもの生きる力を育む家庭について、実践例を交え考察する。同業で雇用に性差のない夫婦が、家庭運営、育児においても平等であろうと奮闘するな

か、第1子が学校への行き渋りをする。子どもの心を愛情で満たそうとしたとき、出産、授乳を通じて子どもに密着している母親は、子どもが最も求め、安心を与えられる存在と認識し、ヒトの起源に照らし合わせ、実践を試みた。母親は、肌のふれあいや、笑顔でプラス思考の言葉がけをすること、子どもをまるごと受け入れることで、自己肯定感、自尊感情、基本的信頼感を育てていった。>



（研究発表の模様）

○遠藤暢宏氏「いじめ、引きこもり、犯罪、少子化、虐待等の社会問題を改善するために」

<ごく普通の家庭の中で行われている不適切な養育によって子供が愛着スペクトラム障害に陥り、そのことによって将来的に、家庭崩壊、虐待、結婚回避、引きこもり、犯罪等の様々な社会問題が引き起こされることがある」とする専門家の指摘がある中、既に自治体が全ての親を対象に実施している妊婦検診等の機会を利用して、愛着理論に基づく適切な養育の在り方を伝える啓蒙プレゼンテーションの視聴を広く行うことが、負の世代間連鎖や愛情を受けた親でさえも陥る母性喪失症状を減らし、ひいては我が国の様々な社会問題を改善するうえで有効であると考えている。本プレゼンでは、「①愛着の意義とその形成に必要な育

児環境、②子供の二大愛着不全症状とその原因となる子育て、③二大愛着不全症状を改善するための父母両性それぞれの働きを表した具体的な支援方法、④『③』の支援方法を用いた3つの場面毎の具体的な子育て方法等』を紹介する。>

○岡本恵子（三重県特別支援学校教諭）「自己肯定感についての一考察—教護院における小舎夫婦制の寮舎での家庭的処遇に着目して—」

<人の教育の出発点である家庭教育について、『きみが必要だ 非幸少年と共に生きて』の検討、その著者と寮舎を運営してきた小野木典子さんへのインタビューから教護院での家庭的処遇を振り返る。さらに、文部科学省などの調査と照らし合わせて、家庭教育について考察する。家庭に代わる教育を行ってきた教護院では、夫婦で寮舎を営み、教護である夫を父親、保母である妻を母親として非行少年と起居をともにする中で、衣食住を安定させ、家庭の温かさや教育を施してきた。家庭にも学校にも居場所のなかった子どもを、小野木は「非幸少年」と表した。令和3年版子供・若者白書によると、居場所の数が多いほど、自己肯定感やチャレンジ精神など将来への希望も高くなっているという結果が出ている。小野木が教護院で実践した自信回復の教育とは、子どもの居場所作りの取り組みであり、そこから自己肯定感を高め、立ち直りへと導いたのである。>

○上岡紀美（兵庫教育大学大学院）「保育者の言葉がけに関する研究—メンタライジング的応答のあり方を探る—」

<本研究では、安定したアタッチメントを支える能力とされるメンタライジングに

着目し子どもに向けた言葉がけを通してメンタライジング的応答の実態を探ることを目的とした。具体的には、保育士4名を対象に保育中の言葉がけを録音したのち逐語録を作成し、それらをカテゴリー分類することで応答内容の分析を試みた。その結果、保育士ごとに言葉がけの特徴が見出されるとともに、S園の保育士は共通して子どもの気持ちの確認や思いの把握を頻繁に行っている一方、T園の保育士は明確な指示や状況把握を重んじる傾向にあるなど、所属する園によってもその特徴に違いが見られた。これらの結果は、保育方針や保育研修をはじめとした保育士の応答に関する意識のあり方が子どもへの言葉がけに影響している可能性を示唆している。>

○大橋喜美子（大阪総合保育大学）「質問紙調査にみる乳幼児の感性を育む保育環境—保育者が感動した子どものつばやきとの関連から—」

<本研究では、自然環境をとらえる視点として、自然の中で遊ぶといった概念とあわせて、室内にいても自然に気づく感性の育ちを研究領域としている。一方で、乳幼児の感性をより豊かに育む環境は「自然」であると仮説を設けて研究を進めた。研究の方法は現役保育者に質問紙調査で回答を求めた。そして、乳幼児が周囲の環境に気づきつぶやく内容について、感動的に受け止めた保育者の記述から分析を行った。結果、園外遊び（散歩）の経験がある乳幼児は自然を対象とした気づきが多く、全く経験がない乳幼児に対する保育者の感動は子どもの発達に関するものだった。そのため、本研究における感性を育む保育の環境には、園外における遊びが重要であると示唆された。>

○新川泰弘（関西福祉科学大学）「保育所と地域子育て支援拠点における子育て支援の質についての一考察」

＜本研究では、保育所から地域子育て支援拠点への配置換えを経験した保育士Aさんを対象にインタビュー調査を行い、調査データを大谷尚によるSCAT方法を用いて分析し、それに考察を加えることによって、保育所保育士の子育て支援と地域子育て支援拠点保育士の子育て支援の質についての検討を試みた。その結果、保育所と地域子育て支援拠点では、活動の中心、子育て支援の質、活動自体の枠組みが違っており、とりわけ子育て支援の質については、その違いが、保育士が、保育所では「指導」という「感覚」、つまり「指導的感覚」で、地域子育て支援拠点では「支援」という「感覚」、つまり「支援的感覚」で、子育て支援にあたっているところにあることが明らかになった。また、それとともに、こうしたそれぞれの子育て支援の根底には、「ケアワーク的枠組み」と「ソーシャルワーク的枠組み」と呼ぶべき活動枠組みの相違が存在していることが指摘できた。＞

○木村将夫（阪南市立たんぼぼ園）他2名「児童発達支援センターにおける子ども家庭支援の因子構造」

＜本研究では、児童発達支援センターにおける家庭支援の実態について明らかにするため、子ども家庭支援関連項目を作成し、因子構造の検討を行った。項目は、児童発達支援ガイドライン及び障害児支援に関する検討会の報告書等から作成し、児童発達支援センターで子ども家庭支援に従事する職員を対象に、質問紙調査を行った。その結果、調査対象者の属性としては、職種で保育士が最も多く、性別は女性が9割弱、

5年以上の経験年数を有する者は6割以上であった。また、作成した子ども家庭支援関連項目について探索的因子分析を行った結果、「問題把握とニーズ確定」「家庭中心の子ども家庭福祉実践」「専門職による子ども家庭支援」の3因子が得られた。就学前の障害のある子どもに対する発達支援や地域支援を行う際、児童発達支援センターが中核となって支援を底上げすることが求められているため、本研究で得られた因子の必要性について今後さらに検討する。＞

○佐藤和順・柏まり（佛教大学教育学部）「『孤育て』を解消するための保育者の働き方改革—保育者の要望を基にした改革の検討—」

＜「孤育て（母親が孤立した状態で子育てに従事）」解消のために父親・祖父母等の育児参画が推奨されたが、十分な効果は得られていない。園を介して保護者と関係性を持ちうる保育者から支援を得ることも検討すべきである。しかし、保育者不足に加え、保育者の職場環境は厳しいものであり、働き方改革なくして保育者が「孤育て」解消を担うのは不可能である。そこで本研究は、保育者による「孤育て」解消の第一段階として、保育者の職場環境や働き方を改革に関する要望を明らかにするものである。具体的には、令和3年10月等にA県で実施された保育研修会参加者216人分のデータをKHcoder（ver3）を用いて、分析した。調査の結果から、保育者は賞与等の処遇を改善すること等の7項目を要望していることが明らかとなった。これらを総合的に実現することが保育者の要望に添った保育者の働き方改革となり、その後の「孤育て」解消の端緒となると考えられる。＞

(3) 講演会

藤原武男氏(東京医科歯科大学教授)「家庭・地域と子どもの健康」

＜午後の部での全体会の講師、東京医科歯科大学国際健康推進医学分野教授の藤原武男先生は、2005年から虐待とソーシャルキャピタル理論という2本の軸を中心に、国内外で、発表を続けておられます。

「コロナ禍とは何だったのか」と先生は問いかけます。コロナは人々の分断を生み出したのではないかと。マスクしかり、ワクチンしかり、飲み会しかり、受講形態しかり。これらは、単にするしない、行く行かないを越えて、人間の幅を狭めることになっているのではないかと危惧されるのです。

では、分断の先に何があるのでしょうか。先にあげたコロナ禍特有の事象により「居心地の良い」人間関係や空間でのみ過ぐす」ことの危うさが起きています。人間性の幅を狭めてしまう「フィルターバブル現象」によって、人と人との関係性が分断されることで、価値観の擦り合わせの機会が奪われ、「共感性の欠如」「さらなる分断」「不信感の増長」「非協力的、非効率的な社会」「格差社会の助長」「孤立した人のさらなる増加」といった負の連鎖が顕著にみられるようになっており、協力して何かをするという人間本来の姿が失われつつあるというのです。ソーシャルネットワークはあっても「人々との協調的な行動を促す『信頼』『互酬性の規範』『ネットワーク(絆)』」のソーシャルキャピタルが、微弱になっていると指摘します。特に子どもにとって必要なサードプレイス(第3の居場所)が剥奪されていることの問題は大きいのです。

このような時代において、両親の帰宅時間と子どもの問題行動に相関関係があると

いうデータが示されました。「両親のどちらかが、子どもが家に帰った時に在宅している」ことで子どもの問題行動が減少しているのです。「子どものメンタルヘルスのためには、1回1時間以上になる留守番は週1回以上させない方がよい」と藤原先生は言います。また、「子どものメンタルヘルスのためには、子どもは規則正しく寝かせた方がよい。遅寝を気にするより大事」とのデータも示されました。さらに、虐待と問題行動について、「虐待によってレジリエンスは下がり、問題行動は増え、向社会性は下がるので、虐待はしつけない」と示唆しています。虐待防止のためには、「地域のつながりが有効であり、親のメンタルヘルス支援」も必要だと言います。親子の関わりと虫歯については、「貧困でも、親子の関わりによってレジリエンスを育み、歯磨きなど口腔内にいい健康行動をすることができ、虫歯を防げる」とのことでした。最後に、「コロナで幸福感は変化していないが、自己肯定感は有意に低下」傾向にあるとのことでしたが、原因については、現在研究中とのことでした。分析結果を楽しみにお待ちしております。



(講演会の模様)

(以上、会報110号より抜粋、文責:巖錫仁・日本家庭教育学会事務局長)